

令和二年八月一日発行
通巻一五二号(毎月一回一日発行)

京鹿子

8月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その五十九



黒南風や魚眼レンズは節穴に
黒南風の森に深まる獣臭
青すだれ両家の父の愛想貌
三味の音に崩るる灯り青簾
蛇衣を脱ぐ探すはロードマップ
火蛾唸るネオオンの街の紙一重

水中花嘘とまことの思ひやり
べガの夜に胸にたたむは忘れ貝
襖ぐ手に星の契りの恋みくじ
蝉生るる西院の河原の無縁仏
片蔭のゆかしき町や西院駅
西院の離宮の翳り梅雨寒し
淳和てふ四町四方つゆ開ける
もんどりを打つ夏蝶の屯所跡

近詠

和田 照海



築守

湖青し茅花流しの逆さ波
築守に瀬鳴りの闇のかぶさり来
日翳りに瀬鳴り風の築番に
搦手の石組み緩き蛇の衣
海峡へ据ゑる晩年の涼み椅子

近詠

松本 鷹根

花檮

芋苗植ゑ孤独たのしみ雨を待つ
汗のシャツ脱ぎて老軀を励ませり
鴨足草風に群れ立つ庭を掃く
旭射し花もりもりと椎大樹
花檮故郷淡く風に浮く



掠り傷

著 莪 摘 み し 山 に 一 礼 し て 下 る
 野 い ば ら の 棘 も 親 し き 掠 り 傷
 指 切 り の 別 れ そ の ま ま 走 り 梅 雨
 雨 の 実 梅 あ ば た 糸 く ぼ も 拾 ひ ゆ く
 雄 岳 に こ 糸 残 し 雌 岳 へ ほ と と ぎ す

英華採集

籠の鳥出るに知られず春惜しむ 北桑田 磯部 時枝
 かごめかごめ：子供の遊びの歌詞の中に「籠の鳥」が出てくる。この歌詞の内容は、余りわからないが遊びは単純そのもので鬼になった子供を廻りの者が歌いながら後ろの正面の子供を当てるもので、何故か鬼になった子供を守っているようにも感じる。掲句は、コロナ禍で外に出られない不自由さを詠んでいる、と解せば自粛を余儀なくされた作者の憂い不満が底辺にある。しかしながら、歌のイメージを考えれば、籠の鳥になることでウイルスから守られていることになる。「春惜しむ」に作者の切ない思いが充分言い尽くされている。

葉桜や幾千万の空こぼれ 横 浜 佐 藤 みち子
 前の句の続きと読めば面白い。「春を惜しむ」は即ち今年の桜を惜しむことになる。知らない間に散ってしまった桜は、今はもう葉桜になってしまっている。葉桜になれば、そこに陽が射しこみ木洩れ日となるが同時に空を垣間見ることが出来る。今年の桜を充分に楽しめなかった多くの人達の残念な気持ちを中七下五の十二音で表現し、コロナ問題を直接言わずに言葉の裏側に内在させている、と言える。

宿罪を償ひきれず火蛾落つる 福 山 高 堀 煌 士
 昆虫には、走光性という光の刺激によって火に集まる正の走光性があり、ミミズなどは暗い方へ移る負の走光性を持つ、と言われる。誘蛾灯は、その走光性を利用して作られたもので、昆虫にとっては自殺行為を積極的に行っていることになり、正に飛んで火に入る夏の虫である。掲句は、誘惑に負けてしまった蛾の無残な姿であり悲惨な末路をたどった結末ということになるが、「宿罪」という美化した言葉によって季語の「火蛾」が、一躍、日の目を見ることになる。

万 緑 藤^故岡 紫 水

崖を打つ夏涛宙をのけぞらす
河骨のまだあかさざる水の丈
万緑に入りて緑を見失ふ
亀鳴くや人の宝は人にあり
金雀枝や生死いづれが一途なる

流れ星 沼田巴字

鬼やんま畳に止まる静かな日
萩こぼれ仏説いよよ確かなる
線香花火うす暗闇によく爆ぜて
流れ星闇夜に睦む死者生者
胸貫くいとしき名前流れ星

一 言 丸井巴水

花洛忌や鬼面に円き角二つ
一言の重みを量る薄暑の夕
寺鳩と老婆かげろふ無人帯
幾何模様崩さぬ村の青田道
初恋を彼方へ置きて風信子

青葉風 植村蘇星

せせらぎや瞳目の青五月晴
名刹の一山包む青もみぢ
あかさたな母音滑らか青葉風
色あせる程に愛着青すだれ
坪庭に映えし箱庭青尽くし

梅雨月夜 北川孝子

青をもて描く闇あり梅雨月夜
誰かれにやさしく生きてついで
松尾社の峯かけ降りる初夏の蝶
悔もたぬ眠りのあとやはしり梅雨
あと少しの未来たのみてついで

花水木 直江裕子

風薫る風のとときどき重くなる
母の日に涙す豆腐切るだけで
五月闇洗ひざらしの言葉吐く
傍らの亡きひと探す花水木
迫りくる卯波高波夫よ死ぬな

不自由 高木晶子

形よき松と如意嶽花終る
夜桜の一層くらし九条邸
血のにほひ持たぬ若葉の生き生きと
不自由や五月の庭に咲くは咲き
薬玉を飾りはかなき人想ふ

聖五月 伊藤希眸

街を守る鉄塔の列聖五月
盆栽の竹に筍もたれずに
山鳩の庭に声充つ梅雨もよひ
戻り寒ベッドは舟に夢遡る
身ほとりに網目をひるげメロン切る

神麓集

鎖 国 奥 田 筆 子

オルガンの息が重たい夏来たる
蛹てふ鎖国もぞもぞ春めざめ
皺だらけ空から帰り来し風船
食言も忘れたふりしてあやめ草
時計草乗換駅がわからない

エンドロール 井上菜摘子

かつて子の机ひろびろと夏野
ふいに現る八月の曲り角
ただしいなんて関係ないよ草茂る
出目金はふたつ年上夏まつり
エンドロールあの睡蓮は咲くだろうか

夕 蛭

村 田 あ を 衣

息かけて醒ます手鏡夕蛭
ほうたると危ふき橋を渡りけり
水のやうやがて火のやう恋蛭
蹤きゆかむ吾もひと夜の恋蛭
戻りきて顔とりもどす蛭の夜





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

濃く薄く浅間の煙袋掛

ライラック小さき家を輝かす

観音へ牡丹の磴をゆるゆると

夏燕遙けきものを掴まむと

筋書はすみれ通りで完結す

散るさくら見上げてけふも自肅の日

ラッパ水仙笑ひころげてゐた昔

春の小川むかし話に一笑す

もしかして私だけですか春愁

また同じ話を聞いてゐる暮春

京田辺 山中志津子

雀の子まだ片言のおさらひ中

古草や洞穴のこと他言せず

牡丹寺へつづく戸毎の火伏護符

葉桜や宇治十帖の風の径

ゆふさりの入り野に遠く雉子啼く

御身拭ふ日や光るまで鍋みがく

春雷に不意を衝かれて不整脈

奔放に薔薇を咲かせて戦忌む

仮の世に生ありてこそ西行忌

春行くや予断許さぬウイルス禍

城陽 鷺山珀眉

福山 亀井 福恵

大の字の嬰を転ばせ袋掛

大江山影も入れたる袋掛

千年藤語る苦楽の水の音

陽光の風受く若葉丹波富士

舗装道に大きく影をつばくらめ

影もたず翳を生みゆく白牡丹

枝をゆらす人語鳥語や袋掛

恋こがる空一枚や水馬

石蹴りの石は小さし山の蟻

大みどり大鐘楼の鎮もれり

つつる薔薇や風の出逢ひを重ねをり

まつさらな少女の眸白さうび

春マスク青き地球の震へをり

残る花吾が身に天意なる一片

時の疫や桜の下で棒立ちす

子雀や廻る廻るよ一輪車

白牡丹久に緋く漢詩集

而して家居の続く春の間

わが胸に街騒遠し薔薇とどく

沙羅の花けふには会へぬ明日の風

福知山 西村 白枿

京都 菊池 和子

高槻 安田 優歌

大阪 本郷 公子



籠の鳥出るにいられず春惜しむ

鳥兎忽忽非ず現世春の乱

籠編んで自給自足や竹の秋

体重計毎日乗らな桜餅

葉桜や幾千万の空こぼれ

会ひたくて枝垂柳は風を呼ぶ

桜霰降る影ひとつなき校舎

ウイルスに人遠ざけて花は葉に

宿罪を償ひきれず火蛾落つる

滅びゆく民族叙事詩地球炎ゆ

翡翠蘭マイノリティーと告げし君

聴くは目を殺せと師言秋の声

ゆすらうめ今も「ちゃん」付け従妹会

父見舞ふ母の笑顔や袖子の花

カランコロン「湯」ののれん揺れ夏隣

午後四時は祖父の手伝ひ百日紅

北桑田 磯部 時枝

横浜 佐藤みち子

福山 高堀 煌士

アリソナ 伊吹 之博